

大学生の社会的スキルおよび自己効力感に対する 「富士登山キャンプ」の教育効果

古賀 初*・加藤 知己**・木村 憲***

The Educational Effectiveness of “Climbing Mt. Fuji and Camping” on social skills and self-efficacy of University Students

KOGA Hajime*, KATO Tomoki**, KIMURA Ken***

キーワード：社会的スキル，自己効力感，コミュニケーション能力

1. はじめに

コミュニケーション能力の育成は、今日の社会的・教育的諸課題を背景に、初等教育から高等教育にわたる各教育段階において重視され、その教育方略に関する検討が近年進められつつある。

平成 22 年、文部科学省は、国際化の進展や価値観の多様化した社会で活躍できる人材の育成と児童・生徒間における人間関係の円滑化を目指し、初等中等教育におけるコミュニケーション教育の具体的な方策や普及の在り方を調査・検討するためにコミュニケーション教育推進会議を設置した¹⁾。

同会議は、平成 23 年 8 月、審議経過報告（「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」）において、コミュニケーション能力を「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ合意形成・課題解決する能力」と捉え、多文化共生時代の 21 世紀においては、このコミュニケーション能力を育むこと

が極めて重要であるとしている。また、コミュニケーション能力を学校教育で育むためには、①自分とは異なる他者を認識し、理解すること、②他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考すること、③集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと、④対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むこと、などの要素で構成された機会や活動の場を意図的、計画的に設定する必要があるとしている²⁾。

また、高等教育においても、近年、コミュニケーション能力の重要性が認識され、アクティブラーニングをはじめとした教育的取り組みが各大学で検討されてきている。

日本経済団体連合会の調査（「2015 年度新卒採用に関するアンケート調査」）³⁾によれば、企業が大卒等の新卒採用選考時に最も重視する点としてコミュニケーション能力を挙げており、過去 12 年にわたり同調査において第 1 位となっている。

このような社会的要請を背景に、経済産業省（2006 年）は、「基礎学力」や「専門知識」を活用してゆく能力として「社会人基礎力」を提唱し、その概念の普及に努めており、各大学では、様々な取

*工学部人間科学系系列講師 Lecturer, Department of Humanities, Social and Health Sciences, School of Engineering

**未来科学部人間科学系系列教授 Professor, Department of Humanities, Social and Health Sciences, School of Sciences and Technology for Future Life

***工学部人間科学系系列准教授 Associate Professor, Department of Humanities, Social and Health Sciences, School of Engineering

り組みがなされつつある³⁾。

社会人基礎力とは、3つの能力(「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」)により構成され、それらは12の能力要素から成る。「前に踏み出す力(アクション)は「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」により構成され、「考え抜く力(シンキング)」は、「課題発見力」、「計画力」、「創造力」、「チームで働く力(チームワーク)」は「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール力」から構成されており、コミュニケーション能力の育成は、大学教育の今日的課題の1つとして、様々な科目や教育場面において意図的な取り組みが求められている⁴⁾。

大学の体育授業においても、経験的には学生のコミュニケーション能力向上に資する可能性は考えられる。しかし、この点を教育目標に定めた授業実践の検証は十分になされていない状況にある⁵⁾。

現在、東京電機大学では、「富士登山キャンプ」(学外集中授業)を開講しているが、この実習においてコミュニケーション能力の育成を意図した授業づくりを進めている。そこで、今回、その基礎資料を得るべく、社会的スキルおよび自己効力感に対する当該体育授業の教育効果について検討してみた。

2. 調査方法および内容

1) 「富士登山キャンプ」の内容

検討対象とした授業は、平成28年8月3日～6日(3泊4日)に山梨県南都留郡西湖畔にある紅葉台キャンプ場および富士山において実施した夏季集中授業「富士登山キャンプ」である。当該授業プログラムは、学生の自主的活動を妨げないように教員の介入は最小限にとどめて計画・実施されている。実習中の班は、原則各班5人で編成し、食事づくりは二つの班が協働して実習活動を行った。

授業の概要は、以下の通りである。

①第1日目13:00の開講式後、まず、「チームワークの重要性-『富士登山キャンプ』を安全で有意義なものにするために-」、「チームワークの定義と要点」等に関する講義を実施した。グループワークとして、各班別に自己紹介、役割分担と自班のスローガンを協議・決定し、本キャンプにおける個人目標および

グループ目標を作成させた。最後に食料や資材の扱い方や食事づくりを含めたキャンプ方法について解説し、期間中の実習スケジュールについて説明した。

②第2日目午前に、「富士登山の方法および安全上の留意点」に関する講義を実施した。その後、各班別に登山計画を協議・作成し、その発表を行った。

③第2日目の18:00に5合目から登山開始、7合目で仮眠後23:00登山再開、8合目にて頂上アタック時と下山時の安全確認、5合目で下山確認(第3日目)を行う。

④第4日目、後片付けを終えた後、本実習の振り返り活動(グループワーク)として、キャンプ活動と登山のチームワークに関する目標の達成度について班別および個人別に自己評価を行った。

2) 調査対象者

当該授業受講学生49名のうち、欠損値のない48名(男子学生46名、女子学生2名、平均年齢20.98歳)である。データ集計は、男女合わせて行った。

3) 授業前後の調査方法および調査尺度

授業前調査は、当該授業の約1週間前(7月25日)に東京千住キャンパスにて実施した。授業後調査は、キャンプ場において当該キャンプ最終日(8月6日)のグループワーク(振り返り活動)時に実施した。

なお、授業前調査時に、受講予定者に対して本調査目的、個人情報保護、研究データ提供に対する同意撤回の自由がある旨、口頭で説明し調査協力を求め、回答をもって同意を得たものとした。

社会的スキルの調査尺度は、菊池によって開発された「社会的スキル尺度」⁵⁾(以下「Kiss-18」)を用いた。本尺度は、18項目から成り、5件法で回答する方式である。回答は得点化され、一般人、大学生の平均値と標準偏差が男女別で示されている。

自己効力感の調査尺度は、「一般的セルフ・エフィカシー尺度」⁶⁾(General Self Efficacy Scale:以下「GSES」)を用いた。GSESは、16項目からなり、各項目は「はい・いいえ」のいずれかに得点が与えられる。合計得点(0～16点)を標準値(Tスコア)化して、学生、成人男性、成人女性別に評価するものである。

各調査ともに、授業前後の値を比較するために対

応のある t 検定を実施し、当該授業の教育効果を観察した。

3. 結果および考察

3-1 社会的スキル (KISS-18) に対する教育効果

まず、KISS-18 の総合得点をみると (図 1)、授業前の値 (58.9) よりも 4.5 ポイント増加し、統計的に有意な上昇が認められた (授業後: 63.4)。このことから、「富士登山キャンプ」は、社会的スキルに対して一定の教育効果を有するものと考えられる。

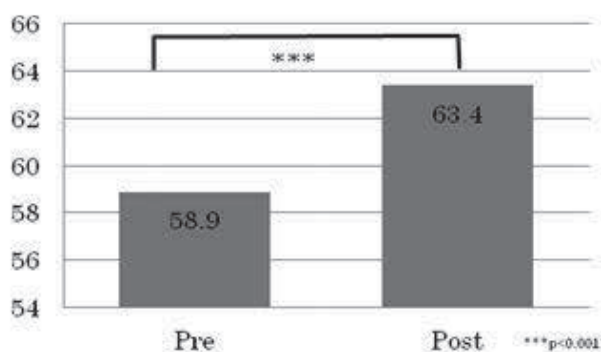


図 1. 社会的スキル(Kiss-18 総合得点)に対する教育効果

次に各項目別に、授業前後の値を比較したところ、表 1 に示すように、18 項目中 10 項目において、統計的に有意な上昇が認められた (表 1)。

授業後に比較的好く向上した項目は、「知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」(+0.63)、「気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか」(+0.56)、「まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか」(+0.34)、「他人と話をしている、あまり会話が途切れないほうですか」(+0.33) などであった。「富士登山キャンプ」では、面識のない学生と衣食住を共にし、キャンプ活動と富士登山を安全に成し遂げる目標を共有する。そして、その目標達成に向けて協働・協力する活動体験が、社会的スキルに対する一定の教育効果をもたらしたものと考えられる。

また、「こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか」(+0.33)、「仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか」(+0.31)、「自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか」(+0.25) など、その他の 6 項目についても、人と関わる体験を通じて改善される傾向が示唆

表 1. Kiss-18 の各項目における授業前後の変化

		Pre	Post	Post-Pre	
		Mean	Mean	平均値	t値
N=48		(SD)	(SD)	の増加	
				分	
1	他人と話をしている、あまり会話が途切れないほうですか。	2.98 (0.84)	3.31 (0.9)	0.33	2.69**
2	他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	3.17 (0.86)	3.4 (0.94)	0.23	1.8*
3	他人に助けることを、上手くやれますか。	3.48 (0.87)	3.69 (0.69)	0.21	1.81*
4	相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	3.23 (0.75)	3.44 (0.99)	0.21	n.s.
5	知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	3.06 (0.95)	3.69 (0.99)	0.63	4.07***
6	まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	3.04 (0.92)	3.38 (0.7)	0.34	2.69***
7	こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。	3.27 (0.96)	3.6 (0.94)	0.33	2.61**
8	気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	2.9 (1.12)	3.46 (0.82)	0.56	3.64***
9	仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。	3.44 (0.9)	3.75 (0.79)	0.31	2.18**
10	他人が話をしているところに、気軽に参加できますか。	3.02 (1.06)	3.1 (0.97)	0.08	n.s.
11	相手から非難されたときにも、それをうまく片付けられますか。	3.15 (0.95)	3.4 (0.84)	0.25	1.73*
12	仕事上で、どこに問題があるかすぐにみつけることができますか。	3.25 (0.89)	3.38 (0.89)	0.13	n.s.
13	自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	3.17 (1.1)	3.42 (1.01)	0.25	1.77*
14	あちこちから矛盾した話が伝わってきて、うまく処理できますか。	3.35 (0.98)	3.58 (0.82)	0.23	n.s.
15	初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。	3.21 (0.92)	3.44 (0.97)	0.23	n.s.
16	何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。	3.98 (0.89)	4.02 (0.7)	0.04	n.s.
17	まわりの人たちが自分と違った考えを持っていても、うまくやっていますか。	3.75 (0.73)	3.69 (1.03)	-0.06	n.s.
18	仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。	3.44 (0.99)	3.69 (0.9)	0.25	n.s.

された。

これらの社会的スキルに対する効果は、富士登山キャンプにおける個々の活動、すなわち自己紹介、役割分担の協議・決定、キャンプ活動の個人目標・班別目標の作成と共有、登山計画の作成・発表、食事づくりや富士登山などのグループワークの実体験を通じて包括的に育まれるものと推察される。しかし、授業の有効性を高めるためには、授業内容・方法の、どの側面を具体的に改善すべきか、今後、この点について定量的に検討する必要があると考える。

3-2 自己効力感 (GSES) に対する教育効果

Kiss-18 と同様に、自己効力感 (GSES) の標準化得点換算値についても授業前後の値を比較したところ、図 2 に示すように授業前の値 (52.4) よりも 5.1 ポイント増加し、統計的に有意な上昇が認められた (授業後 : 57.7)。このことから、「富士登山キャンプ」は、自己効力感に対しても、一定の教育効果を有するものと考えられる。

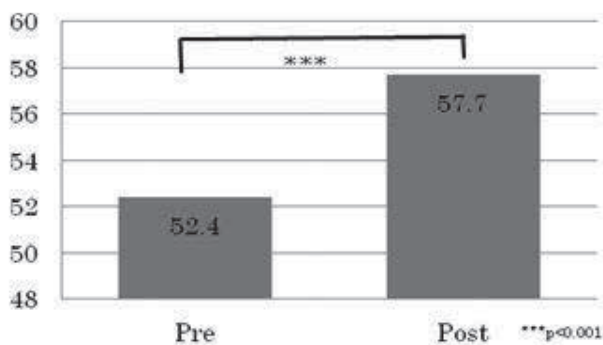


図 2. 自己効力感 (GSES 標準化得点) に対する教育効果

人間の行動を決定する要因には、先行要因、結果要因、認知的要因があるが、自己効力感は、先行要因の主要な要素であり、自己効力感の変容が、結果として行動変容の可能性を高めるとされる⁸⁾。そして、自己効力感は、①遂行行動の達成、②代理体験、③言語的説得、④情動的換気の 4 種類の情報源によって向上すると考えられている⁸⁾。

「富士登山キャンプ」では、心身ともに過酷な富士登山を達成する経験 (①) や、手際よくキャンプ活動を行う仲間の行動を観察したり (②)、富士登山時に一般登山者から励まされる経験をしたり (③)、面識のない人との共同生活の不安が解放される体験

や登頂の達成感 (④) 等、当該授業における様々な経験が、自己効力感の向上に好影響を及ぼしたものと考えられる。

しかし、社会的スキルに対する効果と同様に、自己効力感に対する有効性を高めるためには、当該授業において自己効力感の向上に寄与する活動を具体的に把握してゆく作業が肝要と考える。

4. おわりに

今回の調査結果から、「富士登山キャンプ」は、社会的スキルおよび自己効力感に対して一定の教育効果をもたらすことが確認され、新たな検討課題が明らかとなった。

今後は、授業改善を進めるにあたって、当該授業における個々の活動の中でコミュニケーション能力育成に最も有効な内容を探索的に検討するとともに、向上した社会的スキルや自己効力感の持続性についても検討を加えたい。また、種目が異なるゴルフ実習やスキー実習などの学外集中授業においても、同様の効果が得られるか否かについても検証を試みてみたい。

参考文献

- 1) 文部科学省コミュニケーション教育推進委員会(2011): 子どもたちのコミュニケーション能力を育むために (審議経過報告) (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/1310607.htm)、アクセス日: 平成 28 年 8 月 18 日
- 2) 日本経済団体連合会 (2016): 2015 年度新卒採用に関するアンケート調査 (<http://www.keidanren.or.jp/policy/2016/012.html>)、アクセス日: 平成 28 年 10 月 3 日
- 3) 経済産業省 (2006): 今日から始める 社会人基礎力の育成と評価」～ 将来のニッポンを支える若者があふれ出す! (<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>)、アクセス日: 7 月 30 日
- 4) 井斧まい、河村茂雄 (2016): 大学生の社会人基礎力の獲得タイプと自我同一性との関連、早稲田大学大学院教育学研究科紀要、23 号-2、61-71
- 5) 西田純一 (2012): 社会的スキル向上を意図した大学体育授業 (第 12 章)、橋本公雄ら編著、未来を拓く大学体育、授業研究の理論と方法、福村出版、187-196
- 6) 菊池章夫 (2004): KiSS-18 研究ノート 岩手県立大学社会福祉学部紀要 第 6 巻、第 2 号、41-51
- 7) 坂野雄二・東條光彦 (1986): 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み、行動療法研究、第 12 巻、第 1 号、73-82
- 8) Bandura, A. (1977): Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215